

タイトル『灰街(はいがい)』(約2500文字)

(※第1話目のネームをご制作ください)

第1話 再燃

薄暗い部屋に、安物の蛍光灯が唸り声を上げていた。
ビルの五階、窓のない一室。
パイプ椅子に縛られた若い男が、喉の奥で嗚咽を漏らしている。

「なあ、金はもうねえんだって……！」

血でぬめる床。壁際に立つのは、無精髭を生やした中年の男――

黒川陸(くろかわ・りく)。元刑事。
半年前、警察を追われた。理由は口にしない。彼は無言で監視カメラのレンズにガムテープを貼る。

その瞬間、ドアが破られる轟音。

闇から数人の男たちが飛び込んできた。一瞬の静寂の後、黒川は体をひねり、ナイフを振る敵の腕を押さえ、壁に叩きつける。

「相変わらずだな、元刑事さん！」

暗闇の中、影が素早く飛び出し敵を殴り飛ばす。

神楽――元半グレ幹部。影のまま敵に踏み込み、手刀一閃で一人を制圧。

ナイフが弾かれ、床に血の飛沫が跳ねる。蛍光灯がバチンと音を立てて消え、部屋は暗闇に包まれる。

息を整える黒川の肩が小さく震える。その闇の中で、神楽の低く乾いた笑い声が響いた。

二人のバディとしての再会と、街の闇の恐怖が同時に立ち上がる瞬間だった。

ネオンが濡れていた。

雨上がりの歌舞伎町は、夜の熱と排気ガスを吸い込んで、煙のように光を滲ませていた。

黒川は、傘を差すこともなくその街を歩いていた。

数年前まで、彼はこの街を「捜査の対象」として見下ろす側の人間だった。

いまは違う。見上げる側だ。

黒川「……また消えたらしいな」

路地裏に貼られたチラシの顔写真を見つめる。
ホスト、22歳。行方不明。これで三人目。
いずれも、最後に確認されたのはこの一帯。
だが、警察は動かない。裏付けも、被害届も出ていない。
黒川が動く理由は、別に正義感なんかじゃない。
失踪したホストの一人が、彼の「依頼人の息子」だった。

「黒川さん、例の件……見つかったか？」
背後から声がした。振り返ると、安っぽいスーツに金髪の若者が立っている。
この街に似つかわしくないほど真っ直ぐな目。
「まだだ」
黒川は短く答え、煙草に火をつけた。
火が瞬いた瞬間、空気がわずかにざらつく。
遠くでパトカーのサイレンが鳴り、夜が息を飲んだ。

午前二時。
黒川は場末のバー〈GUILD〉のドアを押した。
看板のネオンが半分切れていて、“GUI_”としか光っていない。
中では男がひとり、バーカウンターを拭いていた。
タトゥーを覗かせた腕。だが、その動きはやけに静かで、無駄がない。

「……神楽」
「よっ」

神楽翔。
半グレグループ〈Babel〉の元幹部。
裏では“神楽の目”と呼ばれた情報屋。
黒川とは、ある事件をきっかけに手を組んだことがある。
そして同じ事件で、二人はそれぞれの居場所を失った。

黒川はカウンターに腰を下ろした。
黒川「消えた若いホスト、三人。誰かの仕業だな」
神楽「警察は？」
黒川「動いてない。表向き、全員“自発的失踪”だ」
神楽「この街に“自発的”なんて言葉が似合う奴、いねえよ」
神楽が笑い、グラスを拭く手を止めた。

黒川はスマホを取り出し、写真を見せた。

写っているのは、消えたホストのひとり。首筋には見覚えのあるタトゥー。

神楽の目が細くなった。

神楽「……それ、“Babel”の刻印だ」

黒川「やっぱりな」

神楽「けど、俺の知ってる連中は全員シマを畳んでる。あのマーク、最近は使われてねえはずだ」

黒川「それでも現場にあった」

沈黙。

店の外から、パトカーの赤色灯がわずかに差し込む。

二人の影が、グラスの中で歪んで混ざった。

神楽「で、あんたはどうするつもりだ？」

黒川「知り合いの記者がこの件を追ってる。警察が動かないなら、俺が掘るしかない」

神楽「“元刑事”が一人で裏に突っ込むってか。相変わらずだな」

黒川「お前もだろ。まだ情報屋続けてるんだろ？」

神楽「まあな。こっちは“金になれば”って話だ」

黒川が立ち上がる。神楽もグラスを置いて、その背に声をかけた。

神楽「黒川、まだお前は正義を信じてるのか」

黒川「……」

黒川は答えず、ただ扉を開けた。

外の空気は生臭いほど湿っていた。

遠くで誰かが叫び、救急車の音が近づいてくる。

神楽はその背中を見送りながら、小さく呟いた。

神楽「……やっぱり、似てんな。俺たち」

翌朝。

黒川は新宿署近くの喫茶店にいた。

対面には、新聞記者の女——白石。

目の下にクマを作り、手帳を叩きながら低い声で言った。

白石「黒川さん。失踪事件、これだけじゃない。ここ半年で十件。全員、夜職の人間」

黒川「共通点は？」

白石「金の流れ。全員、同じ闇金グループから借りてた」

黒川「名前は」

白石「“RIZE”」

その瞬間、黒川の眉がわずかに動いた。

RIZE——それはかつて神楽が所属していた〈Babel〉の後継組織の名だった。

——店の奥の窓際。

カウンターに座る細身の影が静かに、二人の会話を聞いていた。

その男——神楽。

黒川はまだ気づかない。

しかし神楽の目は、すでに情報を整理し、次の行動を決めていた。

その存在は影のように静かで、しかし確実に、この事件の行方を左右することになる。

夜。新宿の路地裏。雨に濡れたアスファルトがネオンを反射している。

黒川は傘を閉じ、壁際に立つ。神楽はその隣、フードを深くかぶり、手には薄暗い光の下で光る一枚の写真。

「“RIZE”」

神楽は写真を黒川に向けながら話す。

神楽「……あのガキどもか」

黒川が低くつぶやく。「知ってるな」

神楽は笑いを含んだ声で応じる。

「全部聞いた。あいつら、俺が育てた連中だ」

黒川は黙ったままライターを取り出す。火がつかない。二度、三度——ようやく小さな炎が灯った。

炎の揺れに照らされ、黒川の横顔に緊張が浮かぶ。

黒川「——だったら、手を貸せ」

神楽は写真をじっと見つめ、短く頷いた。

「いいぜ。ただし条件がある」

黒川「言ってみろ」

神楽「昔みたいに”正義”なんて言葉、二度と口にするな」

その直後、突然、ビルの上から何かの気配があり二人が顔を上げると、雨に濡れたアスファルトに向かって、二人のところへ死体が落下してきた。

黒川と神楽は身をかがめ、衝撃をかわす。

落ちてきた男も胸に〈Babel〉の焼印。

神楽が低くつぶやく。「——これは、序章だ」

黒川は死体を見下ろし、冷たい視線を路地の奥へ向ける。

黒川のスマホが震えた。

画面には、非通知のメッセージ。

一行だけ。

次は、お前だ。

黒川は画面を閉じ、夜空を見上げた。

黒川の瞳が、路地のネオンを反射して冷たく光る。
その背後、濡れた路地には静かな雨音と街の闇が広がっていく。
